

# 学び

今、学ぶことはきつと未来へつながっている

150年を超える歴史を持つ義塾には、「時代に惑わされず、自ら考え、学ぶ」伝統が根付いています。戊辰戦争の折、新政府軍と旧幕府軍による砲声が近くに轟く中で、泰然とウエーランド経済書の講義を続けた福澤諭吉先生の故事は、「学び」こそ未来につながる道であることを私たちに教えてくれます。また、太平洋戦争で多くの校舎を失ったにもかかわらず、いち早く仮校舎で授業を再開したことも、決して「学び」を止めてはならないという義塾の姿勢の現れです。

そして、東日本大震災から人々が力を合わせ立ち上がろうとしている今、たくさんの塾生が、復興に向けた活動に参加しています。自分で考え、行動し、学び得るものは、必ずや未来を創造するための大きな糧となることでしょう。今号の特集では、募金活動、被災地でのボランティア、日本への留学を通じて学ぶ塾生たちを紹介しします。



ONO, A!

東北慶應学生会 募金活動

小野 愛君 ▼P.4

2011年3月11日、故郷が津波にのまれていく映像を真つ暗な部屋で見つめた彼女。不安とショックで部屋から出ることもできなかった彼女は、数日後、このままでは何も変わらないと、同郷の塾生たちと一緒に街頭に立って、募金活動を始めます。復興のために何ができるかを考えることで自らの故郷への関わり方を見出しました。

南三陸支援プロジェクト

梶川洋祐君 羽田健太郎君  
安井將之君 栗津文香君 ▼P.6

夏休みを利用し、津波被害を受けた宮城県南三陸町での支援プロジェクトに参加した4人。事前のワークショップで、町の歴史や文化、活動に取り組む際のマナーを学び、現地に入りました。彼らのコミュニケーションを大事にする姿勢は、被災地の人々にもしっかりと届きました。

環境情報学部GIGAプログラム第一期留学生

長嶋モニカ君 朱俞君 ▼P.8

環境情報学部では、英語で卒業まで学べるGIGAプログラムを2011年9月にスタートさせました。ウクライナから来た長嶋モニカ君と、台湾出身の朱俞君はその第一期生です。義塾に入学した喜びを語るふたりが、いまの日本で学びたいこととは……。



CHU, Yu



NAGASHIMA, Monika



AWAZU, Fumika

YASUI, Masahiro



宮城県南三陸町とは

東部太平洋沖に2000年、長さ1400kmの東北地方太平洋沖地震発生。発生後、津波、地震後遺症、原発事故発生。人口1938人、面積1056.2km<sup>2</sup>（東北1県中約10%）。観光資源豊富で、観光、水産、林業が盛んである。

復興支援の取り組み

- 1. 復興支援の取り組み
- 2. 復興支援の取り組み
- 3. 復興支援の取り組み
- 4. 復興支援の取り組み
- 5. 復興支援の取り組み
- 6. 復興支援の取り組み
- 7. 復興支援の取り組み
- 8. 復興支援の取り組み
- 9. 復興支援の取り組み
- 10. 復興支援の取り組み

活動内容

- 1. 復興支援の取り組み
- 2. 復興支援の取り組み
- 3. 復興支援の取り組み
- 4. 復興支援の取り組み
- 5. 復興支援の取り組み
- 6. 復興支援の取り組み
- 7. 復興支援の取り組み
- 8. 復興支援の取り組み
- 9. 復興支援の取り組み
- 10. 復興支援の取り組み

SOKO JIKARA NIPPON 南三陸 復興支援団

今こそ、この国の力を貸せるとき。今こそ、この国の力を貸せるとき。今こそ、この国の力を貸せるとき。今こそ、この国の力を貸せるとき。

南三陸 戸倉地区 復興支援団



東北慶應学生会 元代表 文学部4年 小野 愛君

## 東北慶應学生会 募金活動

# 仲間と共に行動を 起こすことを学んだ 2011年

町や田畑をのみ込んでゆく巨大な津波、  
テレビで見るとその映像は東北出身の塾生のみならず、  
すべての人にとって耐えがたいものでした。  
しかし彼らは、故郷のために何かできないかと考え、  
街頭での募金活動を始めました。  
小野愛君らがこの経験で学んだことは、  
人のあたたかさで力強さでした。

なったりした知人が多数いることや、  
親友の家が津波で流されたことも知り  
ました」

しばらくは故郷の惨状を見たシヨツ  
クから立ち直れず、友人との電話で不  
安を紛らわすだけの日々が続いたそう  
です。しかしこのままではいけない  
という思いが、小野君を積極的な行動  
へと駆り立てます。

「暗い部屋で、何かしなくては、でも  
私に何ができるのだろうかと考え続け  
ました。そして、引きこもって泣いて  
ばかりでは駄目だ、ドアを開けて、と  
にかくできることから始めようと募金  
活動を決意しました。私の発案には、  
所属していた東北慶應学生会の宮城、  
岩手、福島、青森出身の仲間、さらに  
先輩の塾員も加わり、約10名が集まっ  
てくれました。街頭に立ち、大きな声  
を出して呼び掛けることは、とっても  
勇気のいることでした」

東北慶應学生会を中心としたメンバ  
ーは、田町と渋谷の街頭で3月19日か  
ら約1カ月間、20回近くの募金活動を  
行い、総額は200万円を超えました。  
また日吉キャンパスでも、応援指導部  
の協力を得て塾生に東北の現状を伝え、  
募金をお願いする場を作りました。

引きこもっていても駄目だ  
できることから始めよう

小野愛君の故郷は宮城県多賀城市。

仙台と松島の中ほどに位置し、東日本  
大震災で大きな被害を受けました。

「地震が発生した2011年3月11日  
の午後は就職活動で会社訪問中。東京・  
五反田のビルの中にいました。強い揺  
れを感じながら、震源は宮城かも」と  
思いました。その2日前に宮城でかな  
り大きな地震が起こっていたからです。

不安の中し、実家と連絡を取ろうに  
も、携帯電話も公衆電話も通じません。  
テレビでは多賀城市近くの製油所が炎  
上するシーンが映し出され、住民に避  
難指示が出ていることが報道されて、  
もう家族に会えないかもしれない、と  
不安にかられました。部屋に閉じこも  
り、明かりをつける気にもならず、暗  
闇の中で家族の無事を祈り続けました。  
ようやく連絡がつき、家族全員の無事  
が確認できたのは14日未明でした。し  
かし同時に、亡くなったり行方不明に



「本当に多くの方が励ましの言葉とともに募金をしてくれました。70年前に義塾を卒業したとおっしゃる大先輩の塾員の方もいました。東北出身者だけでなく、

東京に暮らす東北にゆかりのない人たちも、思っていた以上に震災被害に心を寄せてくれたことを、ありがたく、そして心強く思いました。また、東北出身の方から、「辛いけれど、一緒に頑張ろうね」と声をかけられたときには、涙があふれてきて、仲間みんなで目を赤くしながら募金を続けました」

学校で充実した日々を過ごしながらも、「いつも慌ただしく、我先に人が動く都会の生活になじめない」と感じていた小野君ですが、募金活動はその心を大きく変えてくれました。

「心のどこかで、東京は冷たい人の集まりだ、と思っていました。しかし仲間と共に、行動を起こしたことで、苦しみに共感し、手を差し伸べる、心のあたたかさは、都会の人だろうと地方の人だろうと変わりない」と分かりました」

その事実、新学期のゼミの開始日

にもあらためて知ることになります。「今回の震災をどう受け止めていますか」という教師からの問いかけに対し、ゼミ生たちが語った答えは、どれも震災について真剣に考え、受け止めていることが十分に伝わってくるものでした。「この悲しみと苦しみは東北人にしか分らないと決めつけて、心を閉ざしていたことを反省し、人と人はつながることができると学びました。もし地方出身で、東京の暮らしになじめないと感じている人がいたら、まず心のドアを開き、いろいろなことにチャレンジしてほしいと思います。大都会ゆえに東京はいろいろな可能性に満ちた場所、自分が行動を起こすことで、何



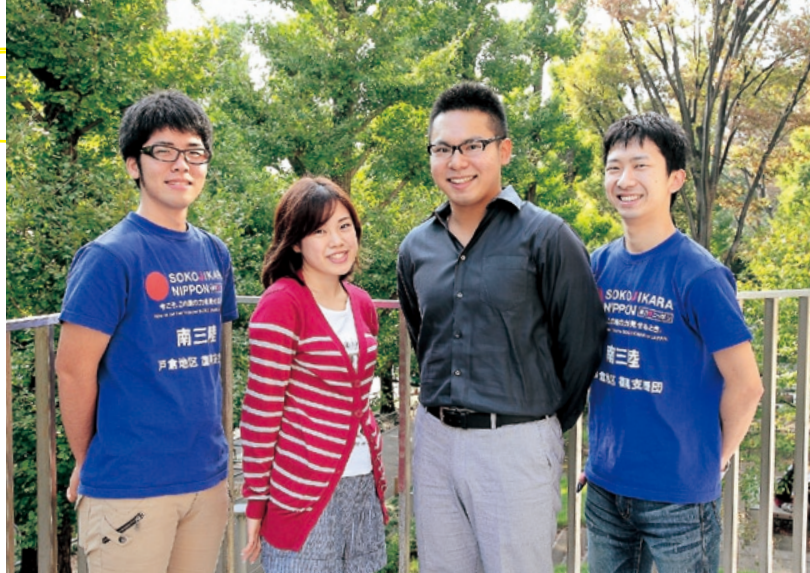
かが始まり、大きな経験が得られます」  
**東北を元気にしたいと  
現地採用で就職**

小野君は今春から仙台の損害保険会社に就職することが決まっています。震災以前は東京で就職するつもりだったそうですが、2つの理由から地元(地域採用)での就職を決心しました。

「一つは、家族の安否が分からないままに、不安に押しつぶされそうな時間を過ごしながら、私は家族が大好き、家族が見えないところにいるのはいやだと思ったこと。そして、もう一つは、東北で損害保険の仕事をするのは、復興のために極めて重要だと考えたからです。この就職は、東北を必ず元気にするんだ、という自身の決意でもあります」

4月から故郷で暮らす小野さんには、小さな夢があります。

「多賀城近くの七ヶ浜の海岸道路が復旧したら、晴れ渡った日に、家を失った親友と一緒にサザンオールスターズの『希望の轍』を聴きながら、その道路をドライブすることです。その日が早く来ることを願って、故郷の宮城で頑張ります」



理工学部2年 羽田健太郎君  
 経済学部2年 安井將之君  
 経済学部2年 栗津文香君  
 経済学部2年 梶川洋祐君

少しでも役に立てるなら、とプロジェクトに参加

——この支援プロジェクトに参加した理由を聞かせてください。

**栗津** もともとボランティア活動に関心があり、カンボジアに図書館をつく

## 南三陸支援プロジェクト

# 支援ボランティアで学んだこと

有志の教員、塾生によって育まれ、義塾の助成を受けて、2011年7～8月に実施された「夏休み！南三陸支援プロジェクト」。日吉から宮城県南三陸町まで往復バスが全10回にわたって運行され、延べ260名以上の塾生と教職員が被災地でのボランティア活動に参加しました。瓦礫の除去、草刈り、子どもたちへの学習支援などを通じて、塾生たちが学び、考えたことは。

る活動など、海外でのボランティアに取り組んでいました。震災後の状況を見聞きするたびに、「いま東北で“何か役に立てることはないだろうか”と問い、参加しました。

**羽田** 僕の場合は、大学では勉強以外にも何かしたいと思ってはいたのですが、熱中できるものを見つけられず、もどかしさを感じていました。そんなときに、プロジェクトの話を知り、思



い切って飛び込んでみようとしてスタツフになりました。その時点では、決してボランティア意識が高かったわけではありませ

ん。しかし、ワークショップや講演会の手伝いをしていくうちに、やはり現地を見なければと南三陸に行きました。——南三陸町では、どんな活動をしたか。

**安井** 瓦礫の片付けや家屋の清掃のほか、仮設住宅ではベンチを作ったり、子どもたちと一緒に遊んだり、勉強したり、「お茶っこ」というコミュニティカフェを運営したりと、いろいろです。また宿泊している民宿の掃除や配膳なども手伝いました。今でも思い出すのは、老人ホームで作業中に、泥まみれの家族の写真や手紙を見つけた時のことです。家族のことを思いながら余生を送っていたお年寄りを襲った悲劇を思うと、被災者の方たちと被害を受けていない自分の暮らしとのギャップに愕然としました。あたりまえに続く

思っている生活を、一瞬で失ってしまったことがあるのだと実感し、あらためて今の暮らしの大切さを思いました。

## 南三陸町が愛着ある かけがえのない場所に

——被災地の人とは、どんな交流がありましたか。

**梶川** アルバイト先のテーマパークで、人を楽しませるコミュニケーションの訓練を受けた経験を生かして、子どもたちを元気づけられればと参加したのですが、現地で接する機会が多かったのは、子どもよりもお年寄りの方でした。それでも、おばあちゃんたちに携帯電話の使い方を教えたり、民謡を聞かせてもらったりしているうちに、す

っかり打ち解けて、まるで家族のような気さえしました。そしてボランティアをする前は、被災地の一つとしか認識していなかった南三陸が、愛着のあるかけがえのない場所になったのです。これは実際に被災地へ行き、人々と交流してこそ感じられたことです。



く、孤独を感じておられたようで、その寂しさを私に打ち明けて「話ができてもよかった」と喜んでくれました。孤独だったり引きこもりがちだったりする人には、都会から来た学生ボランティアの方が、逆に気楽に話せる相手なのかもしれません。

——夏休み中だけの活動で終わらせず、次のステップを考えているそうですね。

**羽田** 東京に戻ってからも勉強会が続いています。現地で感じたことや今後何ができるかを話し合い、継続支援の重要さを確認し、より多くの塾生に参加してもらうためにPR活動をすることにしました。同時に、より組織的で実効性の高い活動ができるよう、他大との連携に向けて動き始めています。

### プロジェクトを主導した教員に聞く

## 被災地と 我々の溝を 越える

経済学部准教授  
長沖暁子



家族を亡くし、家を失った多くの人がある被災地、それをテレビで見ている我々。この溝を越えるには現地に行くしかない、プロジェクトを立ち上げました。塾生たちは、前もって南三陸の歴史や産業を学び、悲しみの渦中にある人と接する際の礼儀やコミュニケーション方法を身につけて参加しました。どうすれば信頼関係をつくれるのか、また効率的にチームで動くためには何が大切なのかなど、塾生たちは人間関係を中心に、多くのことを身をもって学んできたと思います。

## 義塾の知の力を 南三陸の未来に 役立てたい

経済学部教授  
津田眞弓



南三陸町に慶應義塾の森（慶應義塾学校）があり、志木高生が研修を行っていたことが町と義塾のご縁の始まりです。今回のプロジェクトは、南三陸町で義塾が、何をすべきか、何ができるのかを模索し、関係づくりの地ならしをするという意味もありました。幸いなことに、塾生と教職員の、真摯に明るくボランティアに従事する姿を見て、被災した方々も徐々に心を開いてくれました。これからは義塾の知の力を、同地の未来に役立てたいと願っています。

# いま、日本で学ぼう

2011年秋、環境情報学部は義塾で初めてとなる取り組みをスタートさせました。英語による授業だけで学部の卒業単位が取得できる「GIGAプログラム」です。9月に入学を果たした第一期生のうち、ウクライナと台湾からやって来た留学生にGIGA留学の魅力を語ってもらいました。

本稿は、「塾」編集部が留学生の言葉を要約し作成しています。

## 英語だけで卒業可能なのが留学の決め手 最先端のICT教育も魅力です

環境情報学部GIGAプログラム  
長嶋モ二力君

[NAGASHIMA, Monika]



父がウクライナ人で、母は日本人。6歳までモスクワで育ち、その後はウクライナの首都キエフでインターナショナルスクールに通っていました。

大学進学にあたっては、イギリス、カナダ、日本のいずれかに留学したいと考えていました。日本に興味があり、

日本語での会話にも自信をもっていたのですが、専門的な授業を日本語で受けて学ぶことには不安がありました。そんな時に母がインターネットで調べて紹介してくれたのがGIGAプログラムです。英語による授業だけで卒業単位が取れるのは魅力でしたし、慶應義塾が名門ということも知っていましたから、すぐに第一志望にしました。

環境情報学部のICT教育が、他大学に比べて進んでいることも大きな魅力でした。機器も環境も充実しているコンピューター・ラボを初めて見たとき

には感動しました。

今は生物学、なかでも脳科学からのアプローチに興味をもっているのですが、まだ特定の分野に限定せず、知的好奇心を他の分野にも広げたいと思っています。その点、SFCは授業の選択がすごく自由なのがいいですね。1年間はいろいろな分野の授業を受けてみるつもりです。

また、英語による授業だけでなく、日本語による授業にも選択の幅を広げられるように、苦手な漢字の勉強もしています。すでに富田勝教授の日本語での生物学の授業も履修しているのですが、専門用語に戸惑いながらもとても楽しく受講しています。

東日本大震災のことはウクライナでも大きく報道されましたから、学校の先生や友人は日本行きを心配しましたが、でも、インターネットで調べたり知人の日本人に話を聞いたりして、安全であると判断しました。実際に住んでみても、何も問題は感じません。

将来は日本で働くことも考えていますが、まだ分かりません。ただ、どの分野で働くにしても、SFCで身につけたICT技術を活用し、仕事に生かせればと思っています。

※ Information and Communication Technology (情報通信技術)

## 「問題の発見力と解決力」を身につけ 大好きな東北の復興の力になりたい

ニュージーランドで生まれ、

その後台湾で育ちました。台湾では、貿易関係の仕事をしている父の方針で、4歳から英語の勉強を始めました。その時に、親日家の祖母と母が「日本語も身につけるべき」といって、並行して日本語も



環境情報学部GIGAプログラム  
朱 俞君  
[CHU, YU.]

習い始めました。ただ高校はニュージーランドに留学したので、より得意なのはやはり英語です。慶應義塾は憧れでしたが、日本語力に不安があり、留学するなら大学院からにしようと思っていました。しかし、英語で学べるGIGAプログラムができたことで、思いがけず学部から慶應義塾に進学できたのです。

特にエキサイティングな授業は、知的

な刺激を幅広く体験できる英語の「創造」クラス。リラクセスした雰囲気の  
中で、塾生も自由に発言して意見を交換します。そのベースになっているのが「みんなで話し合いながら問題を発見し、知恵を集めて解決しよう」とする「問題の発見と解決」という教育方針。これがSFCのいちばんの魅力です。

もともと環境問題に関心があり、将来は環境コンサルティングの仕事をしたいと思っています。SFCではさまざまな分野について広く自由に学ぶことができるので、経済や数学など、いろいろなことを環境と組み合わせる学び、それにICTを融合させて学びたいと思っています。

子どもの頃から、日本好きの家族とよく日本各地を旅しました。特に自然が豊かで食べ物もおいしい東北が好きで、中でも仙台、松島がお気に入り。その東北が東日本大震災で大きな被害を受け、被災された方々はどんなに辛いだろうと心を痛めていました。今、私たちが「問題の発見と解決」能力を発揮して、もっとも力を注ぐべきことは東北の復興だと考えています。まだ学生、それも留学生ですが、大好きな東北の力になればと願っています。

### GIGAプログラム

URL <http://ic.sfc.keio.ac.jp/>

環境情報学部のGIGAプログラム(Global Information and Communication Technology and Governance Academic Program)は、学部で初の英語によるプログラムです。主たる授業はすべて英語で提供され、卒業に必要な単位を英語のみで取得できます。講義形式の授業に加え、学生が能動的に参加するプロジェクトや海外フィールドワークやインターンシップなどを通じて、グローバルに活躍できる人材を育成します。

### あきら基金 - 慶應義塾大学 SFCソーシャル・イノベーション奨学金 (AXIS)

GIGAプログラムで入学した優秀な外国人留学生1名に、「あきら基金 - 慶應SFCソーシャル・イノベーション奨学金 (AXIS)」を授与しています。お申し込みについては、GIGAウェブサイトの Admissions (英文) の項目でお確かめください。選考はプログラム出願時に提出された書類によって行います。奨学金は年額50万円です。